

かながわの考古学

2012.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布（その5）－B1～L2層（まとめ）－ 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その3－ 縄文時代研究プロジェクトチーム	13
神奈川県内出土の弥生時代土器棺（1） 弥生時代研究プロジェクトチーム	21
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（9）－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－ 古墳時代研究プロジェクトチーム	31
神奈川県における古代の鉄（2）－生産関連遺物の集成－ 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	41
神奈川の中世城館（4） 中世研究プロジェクトチーム	59
近世民家の集成（9） 近世研究プロジェクトチーム	69
個人研究論文 神奈川県内出土装飾付太刀に見る象眼等の製作技術の研究 林 雅恵	79

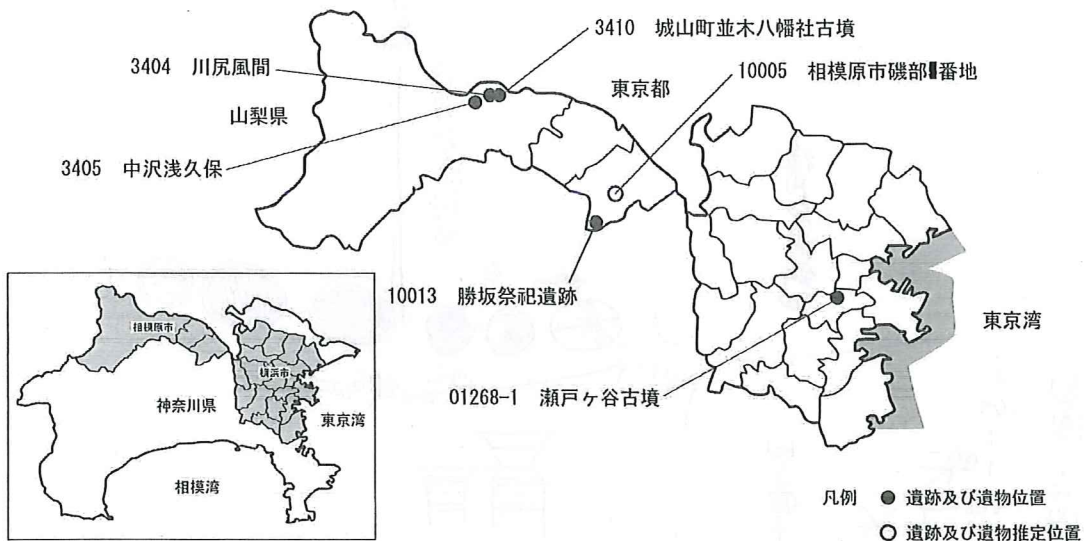
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(9)

— 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 —

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第16号には横浜市域にあたる01122/12268-1番、相模原市域にあたる10005・10013番、相模原市(旧城山町)域の3404・3405・3410番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01122/12268-1番：植山英史、相模原10005番：柏木善治、相模原10013番：新山保和、相模原(旧城山町)3404・3405番：林 雅恵、3410番：小西絵美が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査(踏査)年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔(遺跡及び)遺物(遺構)概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 横浜市01122/12268-1 瀬戸ヶ谷古墳(6) 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

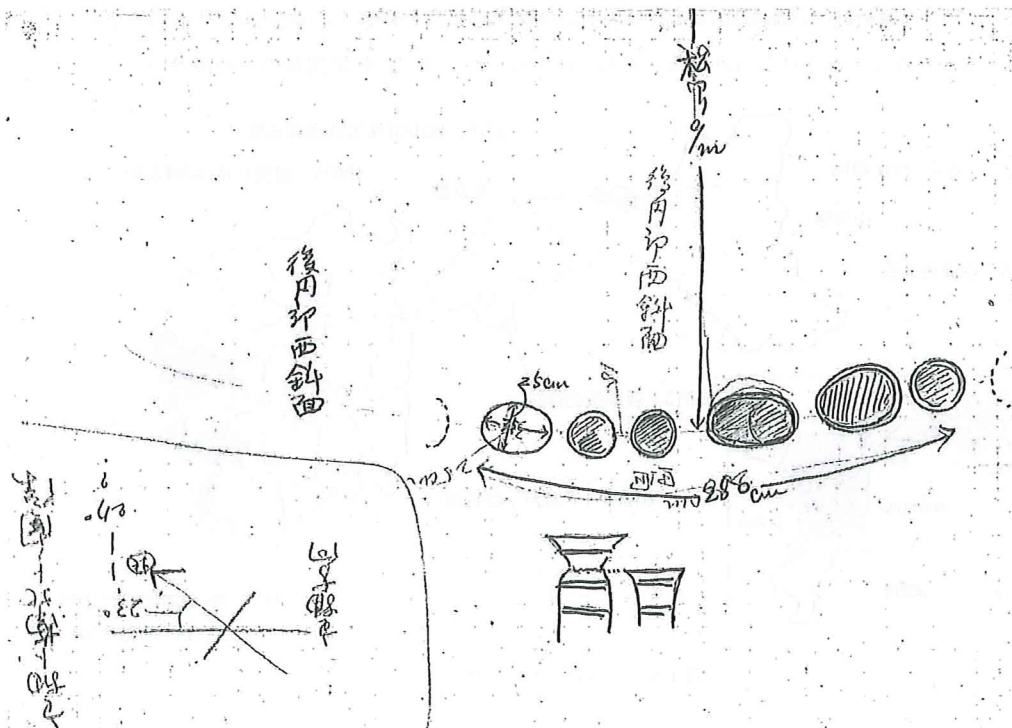
[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[記載内容概略] 瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート6

前回は、資料01268-1(2)②の出土埴輪実測図を紹介した。今回から01268-1(3)方眼ノートの概略について記す。方眼ノートには、主に昭和18(1943)年の調査における遺物の出土状況が書かれている。主な図や記載内容について、頁順に追っていくこととする。第2図は埴輪出土状況のスケッチである。後部西斜面の記載があり、円と楕円の配置、及び円筒埴輪と朝顔形埴輪が描かれている。280cmの記載の間に左から、楕円・円・円・楕円・楕円・円の並びが描かれ、円筒間は15(cm)、楕円の大きさは(長径)35cm、(短径)25cmと書かれている。また、今まで紹介してきた幾つかの資料にも認められたが、本スケッチも鉛筆で書いたものをインクでなぞる、修正する等の跡があり、赤星博士が下書きの後に改めてインクで描いたことが判る。墳頂側には「松ヨリ9m」の記載がある。墳頂方向に目印とした松があったと思われる。図の左下端には逆向きに「主軸と南北の関係」の略図がある。主軸方向が真北に対して「23---27°?」西に向くことを示した図と考えられる。埴輪の配列については、『神奈川県史』資料編20掲載墳丘図にドットが落とされている。同資料は、1950年の調査時を基調としたものと思われるが、後円部西側の斜面には、くびれ部に近い部分と、後円部主軸の西側に列が書かれている。今回のスケッチがこれらの一部に該当するものか、別の配列かは現段階では判断し得ない。今後紹介予定の資料を見通し再度検討したい。(植山)

[掲載図書]『神奈川県史』資料編20考古資料 1979



第2図 埴輪出土位置スケッチ(60%縮小)

年報番号 相模原市10005 相模原市磯部5番地出土遺物 相模原市磯部■番地

1. 赤星ノートの内容

磯部5番地という地番からは、相模川と鳩川、道保川が合流する地点の段丘崖に所在した古墳であったとみられる。ノートの資料には遺物のみの情報しかないが、神奈川県史資料編には「古墳(個人名)宅地内。円墳。横穴式石室。直刀3・金銅環2・水晶製切子玉2出土。相模原市教育委員会蔵」と記される。

[調査(踏査)年月]

資料には年月等は記されていない。また、整理されていた封筒からベルリンの植物園・植物博物館(Botanischer Garten u. Botanisches Museum)から神奈川県立博物館へ送られたことが分かるが、消印等の情報は無い。磯部5番地の記述は、県史以外では確認できないため、1979年に刊行された県史作成にかかる調査の一環で資料化されたと考えられる。

[資料保管場所]

資料中には「相模原市教育委員会蔵」と記される。

[記載内容概略]

出土遺物が記された図のみである。原寸で描かれたとみられ、貼り合わせた紙が折り畳まれていた。図は直刀3振があるが、それぞれ描かれているものが刀身に付随するとみなせば、直刀1は金銅装足金具1、直刀2は切羽1・把縁金具1・喰出鏝1・足金具1・責金具1、直刀3は把縁金具1となり、その他に六窓鏝1、耳環1(同大同質2個)、切子玉2が描かれる。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

直刀(1)は、残存長73.9cm、刀身長66.4cm、身巾3.0cmで、茎の端部が欠失し、刀身は関付近で折損する。関は不均等両関のうち棟・刃区撫角両関で、切先はややふくらが張る。図の関付近に金銅と書かれた巾1.1cmの金具があり、厚さなどの情報は無いが、鞘口の金具もしくは足金具であろうことが窺える。

直刀(2)は、残存長75.8cm、残存刀身長64.5cm、身巾2.8cm、身厚0.9cmで、刀身は関付近で折損し、切先から1/4程度の箇所まで折れ曲がる。関の形状は把縁金具(2-3)と喰出鏝が鏝着しており不明である。把縁金具の内径は3.0cm、足金具(2-4)は3.5cmで、後者は八の字状を呈し、吊下孔が刃側にあるように描かれているため、鏝着していなかったものを填めた可能性がある。責金具(2-5)は図では足金具の鏝側に並べて描かれ、断面形は半月状で厚さ1mm程度と薄い。足金具と責金具には金銅などの書き込みはないが、銅製であるとみなされる。刀身中程に「金銅責」と書かれるが(2-6)、外径3.8cm、内径3.2cm、厚さ1mm程度で、断面の描画が斜位であることから両端で直径が異なるとみられ、袋頭の端面に付される縁金具とも考えられる。

直刀(3)は、残存長78.1cm、刀身長63.7cm、身巾3.0cmで、刀身はおおむね良好に遺存する。関付近に金具が描かれるが、位置からは把縁金具ともみられる。

鏝(4)は六窓鏝で、外径の長さ8.8cm、巾7cm、内径の長さ3.0cm、図の下半1/3程度の鏝化が激しい。直刀1もしくは直刀3の拵えの一部とみられるが、どちらに帰属するかは不明である。

耳環(5)は遺存状態が良かったようで、「厚い金張り鍍ナシ」と記される。縦横2cm程度の大きさで、先に記したように二つ存在していたことが知られる。

切子玉（6・7）は水晶製とみられ六面体のようだが、断面形の情報は無い。6は長さ2.2cm、最大幅1.4cm、7は長さ2.5cm、最大幅1.7cmと不揃いである。

[掲載図書]

神奈川県民部史編集室1979 『神奈川県史』
資料編20考古資料

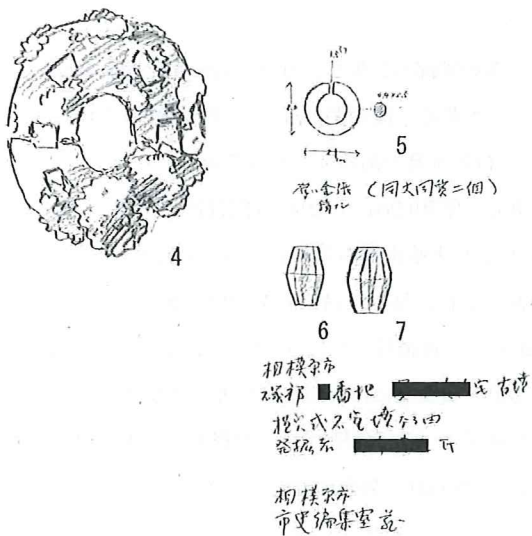
[掲載図書概略]

先にふれた古墳に関する概要は記されるが、挿図や写真などの掲載はない。

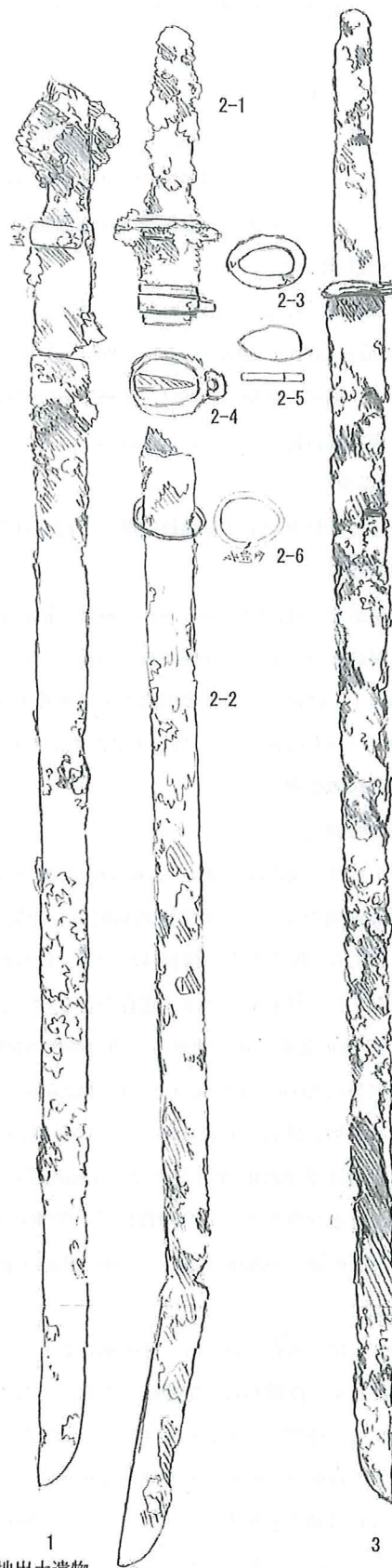
[小結]

相模原市域では、金銅装の大刀が現在までに報告されている資料にはみられず、希少な存在といえる。遺物のうち、関の形態が不均等両関で棟・刃区撫角両関となる大刀は、県下の資料では7世紀第2・第3四半期が多く、大刀や装身具の様相からは概ね7世紀初頭から第3四半期の間に副葬されたものとみなされる。

(柏木)



※縮尺参考=直刀3：全長78.1cm



第3図 相模原市磯部5番地出土遺物

年報番号 相模原市10013 勝坂祭祀遺跡(1) 相模原市磯部字勝坂1904

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

個人蔵

[記載内容概略]

資料の入っていた封筒は、国立国会図書館のもので、神奈川県立博物館御中と記されている。料金別納郵便のため年月日等の情報は無い。封筒裏面に「相模原市勝坂祭祀遺跡(磯部)調査資料」とメモ書きされている。その中に、さらに2通の封筒があり、複数の資料が入っている。今回は、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介する。

封筒の表面には、神奈川県立博物館様と記されており、財団法人博物館明治村のゴム印が押されている。料金別納郵便のため年月日等の情報は無い。封筒の裏面に「相模原市磯部有鹿祭祀遺跡」とメモ書きされている。資料は、県史考古資料の神奈川県内主要遺物調査表3通と遺物の略測図1枚である。調査表の内訳は、2通が新聞記事(第4・5図)で、1通が滑石製子持曲玉の写真(第6図)が裏面に貼付されている。

調査表の新聞は、勝坂遺跡の祭祀遺物発見のニュースがスクラップされている。

第4図の新聞記事には、「47, 4, 12, ■」の日時などのメモ書きがあり、発見者の「■■■■さん(■■■)」とその遺物を市教委に報告した「大和市文化財保護委員 ■■■■さん」の記載部分にアンダーラインが引いてある。調査表には、所有者「■■■■」、住所「相模原市磯部有鹿神社付近」と記載されている。

第5図の新聞記事には、日時や新聞名などの記載はなく、発見者や発見場所、見つかった遺物についての記載箇所を囲み線やアンダーラインなどを行っている。

第6図の写真には、子持勾玉が写っている。写真の写し込みを見ると、「相模原市勝坂出土(■■■■蔵)」とあり、「子持曲玉、滑石製」「相模原市勝坂祭祀遺跡」「昭52, 7, 31」とメモ書きされている。

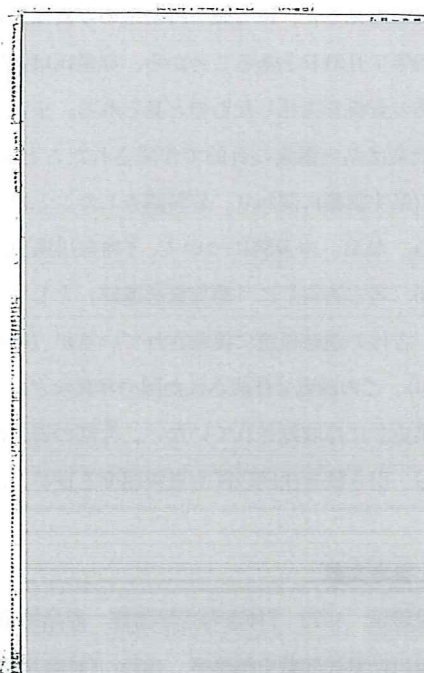
第7図は、第6図の子持勾玉の略測図で、「相模原市勝坂子持曲玉 ■■■■測」とメモ書きされている。子持勾玉の計測値も細かく記載されており、「寸法にあわせて赤描替修正」とメモ書きされている。断面を含めて4面が略測されている。

県史考古資料A

神奈川県内出土遺物所蔵者調査表 年 月 日調査

調査者		住所	
■■■■		相模原市磯部有鹿神社付近	
主要出土品	■■■■		
出土地			
記録	■■■■		
保存	■■■■		
備考	■■■■		

第4図 新聞記事1



第5図 新聞記事2

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

新聞記事を見ると、勝坂祭祀遺跡の発見経緯は、土地所有者の ████████ 氏が昭和30年頃に田に鳩川から水を引くために土木作業を行っていたところ、刀形石製品、大小の子持ち勾玉、鏡形石製品などの石製模造品、直径3から8cmの青銅鏡、土器などを発見し、採取したとある。この資料は、発見者宅で17年間保管されてきたが、地元研究者がこの資料の存在を知り、相模原市教育委員会に報告したことで、世に知られることとなる。

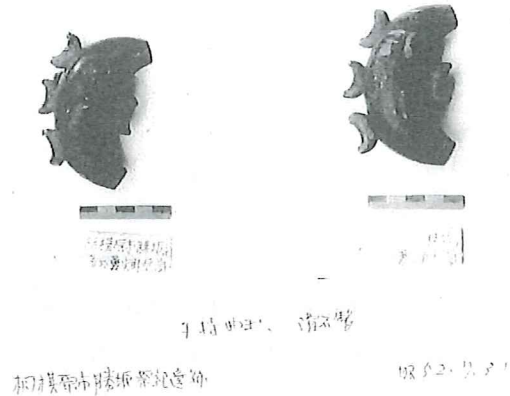
その後、相模原市教育委員会が昭和47年4月16日に國學院大學大場磐雄教授、神奈川歯科大学小出義治教授に調査を依頼する。大場磐雄氏は、同年6月30日に発行された『神道考古学講座 第2巻-原始神道期-』に、「神奈川県勝坂」として本遺跡を紹介し、本資料の一部が口絵写真に用いられ、重要な資料と位置付けている。

本資料を見ると、滑石製子持勾玉の写真撮影日が昭和52年7月31日とあることから、赤星氏は同年に本遺跡の資料を実見したものと見られる。また、この調査表は県史編集の目的で作成されたことから、神奈川県史編纂に関わり、資料調査したことがうかがえる。なお、本遺跡について、『神奈川県史 資料編20 考古資料』に「勝坂祭祀遺跡」として古墳時代・古代の遺跡概説に掲載されているが（神奈川県1979）、この調査で作成された図や写真などは『神奈川県史』には収録されていない。今回の資料は、その時の調査資料の一部であり、他の資料も多数あることから、引き続き次回以降も資料紹介を進め、内容を精査することとしたい。

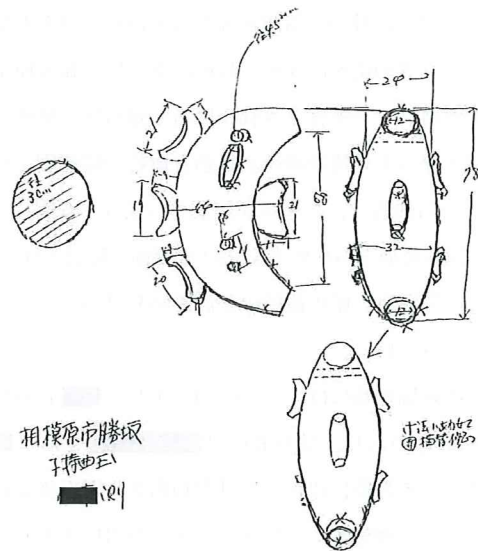
(新 山)

引用・参考文献

- 大場磐雄 1972 『神道考古学講座 原始神道期-』第2巻 雄山閣出版
- 神奈川県県民部史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編20考古資料
- 相模原市 2010 「勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書」『相模原市史調査報告書』6



第6図 滑石製子持勾玉



第7図 滑石製子持勾玉略測図

年報番号 相模原市(旧城山町)3404 川尻風間出土土師器 城山町川尻風間

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] ■■■氏、■■■氏所蔵

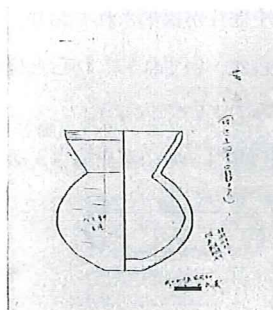
[記載内容概略] 封筒は神代植物公園内植物愛好会のもので、宛先は県立博物館御中となっており、料金別納郵便のため消印等の日付の記載はない。A4サイズの封筒の裏面には「城山町川尻 ■■■氏蔵 土師」と丸囲みされた「城5」の文字が記載されている。封筒の中には3枚の土師器のスケッチを描いた紙が折りたたまれて、同封されている。

2. 掲載資料の整理

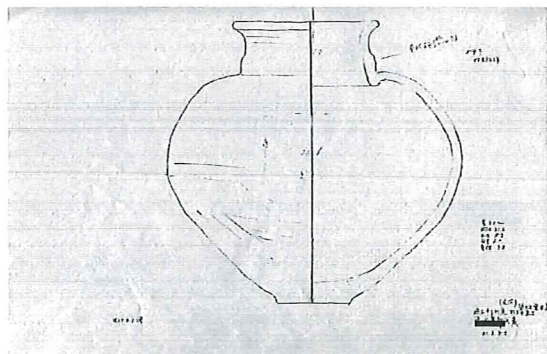
[遺構・遺物概要] ①はA4サイズの紙に埴形の平底壺が描かれている。その右上には「(埴 他にも1個あり、口縁部半欠)」、右中央には法量が書かれ、右下には「城山町川尻風間出土 ■■■氏蔵」とある。また図中には「ヘラ整形 赤焼」とある。②はA2サイズの紙に口縁部が直立気味に立ち上がり、肩部が強く張った壺が描かれている。左下に「昭45.8.1」とあり、スケッチした日付と思われる。右上には「東北S □文いこの□□」、「土師?時期不詳」とメモ書きされ、右中央には法量が、右下には「城山町川尻■■■出土(風間)(■■■氏宅内)■■■氏蔵 42.3. 出土」と書かれている。③はA4サイズの紙に小ぶりの平底の甕が描かれている。口縁下部に稜を有し、やや胴張りである。図中には底部に「穴 後からあけたもの」とメモ書きされている。右上には「昭45.8.2」と日付があり、右下には「城山町川尻風間出土 ■■■氏蔵」と書かれている。

『神奈川県史』には記載がされていないが、『城山町史』には「風間」に関連する遺跡として風間遺跡、風間南遺跡、風間東遺跡があり、報告されている。いずれも境川と丘陵に挟まれた緩斜面地や尾根裾部に立地し、風間遺跡と風間南遺跡からは古墳時代後期の土器片が出土しているが、本資料との関連は不明である。また「■■■所蔵土器」として本資料と類似する実測図が掲載され、法量等は若干異なるが、①は第6図-2、③は第7図-2にそれぞれ比定されよう。また②の壺に類する土器が「広田小学校所蔵」として掲載されている。法量及び口縁部の形状等は異なるが非常に似ている。①は古墳時代中期頃、③は古墳時代前期頃と考えられる。②の壺の時期は不明である。

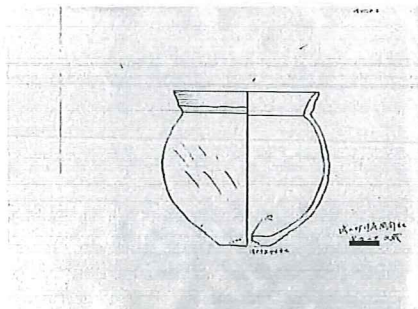
(林)



第8図 埴形土器のスケッチ(約1/4) (①)



第9図 壺のスケッチ(約1/6) (②)



第10図 甕のスケッチ(約1/4) (③)

年報番号 相模原市(旧城山町)3405 中沢浅久保出土土師器 城山町中沢

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] ████████氏所蔵

[記載内容概略] 封筒は神代植物公園内植物愛好会のもので、宛先には県立博物館御中となっており、料金別納郵便のため消印等の日付の記載はない。A4サイズの封筒の裏面には「城山町中沢浅久保(土師セット)」と丸囲みされた「城山4」と記載されている。封筒の中には、3枚の土師器のスケッチを描いた紙が折りたたまれて入れられている。

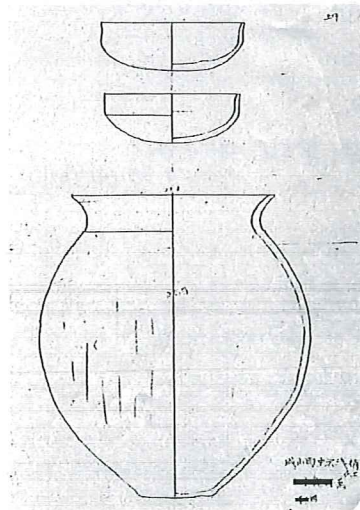
2. 掲載資料の整理

[遺構・遺物概要] ①はA2サイズの紙に土師器3点が描かれている。右上に「土師」、右下に「城山町中沢浅久保出土 ████████氏蔵 ████████調」と書かれている。上の2点はいずれも口縁下部に稜を有した深めの坏で、鬼高式と考えられる。もう一点は口径「19.3」、器高「25.7」という数字が書かれた甕で、やや胴張りである。後期前半頃と考えられる。②はB4サイズの紙に、土師器坏が上下に2点描かれている。坏の図中には「2/3欠」と書き込みがされる。①と同様、右上に「土師」、右下に「城山町浅久保出土 ████████氏蔵 ████████調」と書き込まれている。いずれも口縁下部に稜を有し、底部はやや丸味を帯び、浅めの坏で、鬼高式と考えられる。③はB4サイズの紙に、長胴の甕が1点描かれ、右上に「土師」、右下に「城山町中沢浅久保出土 ████████氏蔵」と書かれている。甕の図中に「胴下部ヘラナデ」と書き込みがされるが、ヘラケズリ調整と考えられ、後期後半頃と考えられる。

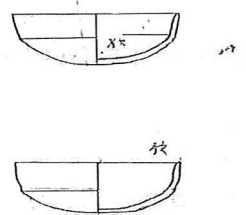
『神奈川県史』には記載がされていないが、『城山町史』には浅久保遺跡について記載がされている。浅久保遺跡は中沢の東岸の傾斜地に位置し、標高は186~194m程に立地している。遺物は、古墳時代後期の鬼高式の土器片が採集されており、古墳時代後期末頃の住居址が2軒検出されたとの報告がされている。本報告の資料は、いずれもこれらとほぼ同時期の古墳時代後期頃と考えられる土師器であり、時期的に対応しているとみてよいであろう。

(林)

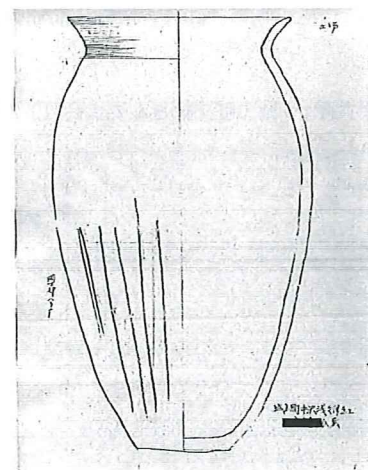
[引用文献] 城山町史編さん委員会 1992 『城山町史』1 資料編 考古・古代・中世



第11図 坏2点と甕のスケッチ
(約1/5) (①)



第12図 坏2点のスケッチ
(約1/5) (②)



第13図 甕のスケッチ
(約1/5) (③)

年報番号 相模原市(旧城山町)3410 城山町並木八幡社古墳 城山町川尻所在

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

資料が収められている封筒は、財団法人博物館明治村のものである。その宛名は、神奈川県立博物館になっている。料金別納郵便のため、消印等の日付は認められない。一方、資料中には昭和56年6月7日、6月14日の日付が見られる。両日とも、並木八幡社古墳について関係する人物とやり取りのあった日付である。

[資料概略]

封筒の裏面には、赤星氏の筆跡で「城山町並木八幡社古墳」と記されている。その脇には、「56年6月14日■■■宮司と本古墳について話す 入梅後追調する件の話大体する」と書かれた紙が貼付されている。

資料は大別して3種類のものがあり、①白井氏とのやり取りに関するメモ、②「並木八幡社古墳」に関連する資料の写しやメモ書き、③35mmのカラーフィルムである。③は縦長の茶封筒に収められ、封筒表面には「城山町並木八幡社古墳所蔵写真複写 境内古墳出土品」と記されている。

2. 記載資料の整理

[経緯]

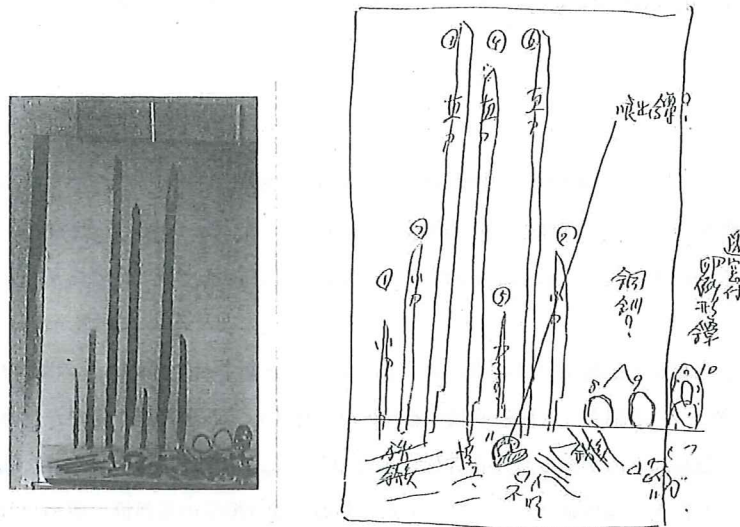
資料を整理すると、次のような経緯があり赤星氏が並木八幡社古墳について調べるに至ったようである。

赤星氏の元に■■■氏という人物から連絡があり、津久井郡城山町川尻の八幡社境内にある古墳について知りたいということだった。メモによれば、この■■■氏は同社の神官であり、鶴岡八幡宮の宮司も兼務する人物であるようである。昭和56年6月7日には■■■氏から再び電話があり、境内古墳から出土したとされる遺物の写真を見てほしいとのことだった。これを受け、赤星氏は同年6月14日に鶴岡八幡宮の■■■氏を訪ねる約束をしている。■■■氏の元を訪れた際に、赤星氏が古墳出土とされる遺物の写真を複写したのが③のフィルムであり、第14図左の写真である。その右側には、写真に写っている遺物のイラストと共に各遺物についてのメモが書き添えられている。

[遺跡・遺物概要]

■■■氏が持参した写真には、直刀3、小刀3、刀子2、銅釦と思われるもの2、透窓付倒卵形鏝1、喰出鏝と思われるもの1、鉄鏃多数等が写っていた。第14図にあるメモには「並木八幡社古墳出土品以外のものも混入しているらしい」とあり、その根拠とされるのが逸見敏刀氏の記録である。これは『無良佐岐』第2号に掲載されたもので、逸見氏が津久井郡川尻村で古墳が発見されたと聞き、現地へ出向き発見者に当時の模様を聞いた。古墳の名称は「小松ヶ岡古墳」とあり、氏神八幡神社の鎮座する小松ヶ岡に所在するという。出土品は直刀3、刀子2、宝珠形鏝1、鉄鏃30、鞘口金具1、砥石1(混入?)、土師器と思われる土器数点とされる。同記録中には、古墳発見あるいは逸見氏の現地踏査に関する年月日の記載は見られないようである。■■■氏はこの「小松ヶ岡古墳」が八幡社境内にある古墳だと考え、赤星氏に写真を提示した際に逸見氏の記録にある遺物内容と齟齬があることを伝えたようである。

赤星氏のメモには、並木八幡社古墳に関する逸見氏以外の文献も登場する。昭和36年刊行の『神奈川縣大観 湘西・湘北』である。石野瑛氏の記述によると、「境内の東に高塚古墳がある。すでにあばかれて石櫛を露出する」とあり、「中から直刀2振、短刀3折と鉄鏃36が出土したという。」とある。発見は「昭和3年の頃か」と記されている。また、昭和42年の『築井文化』第5号「城山町の概要」中には、「小松ヶ岡に鬱



津久井郡並木八幡社新敷柳社(並木)古墳時代の古墳出土品以外のもので混入(2013.4.11)
並木八幡社 古墳時代の古墳出土品以外のもので混入(2013.4.11)
古墳時代の古墳出土品以外のもので混入(2013.4.11)

第14図 並木八幡社古墳出土とされる遺物

蒼たる樹叢をもつ八幡宮の岡」において「大正末期に石造古墳を発見、直刀2振を掘り出した」とある。そして、同書中「城山町歴史年表」1915(大正4)年の項には、「川尻村八幡神社境内に古墳の石窟が発見され、直刀2振、鉄ヤジリ等が出土する。(遺物はその後、所在不明)」と記されている。なお、昭和27年に刊行された『津久井郡勢誌』には、『神奈川縣大観』にある記述とほぼ同文が記載されている。

赤星氏のメモの中には「川尻 並木八幡社古墳について」と題されたメモがあり、赤星氏は同古墳に関する各文献の内容について比較、検討を行ったようである。各文献における並木八幡社古墳の記述には、共通項もあるものの、相違点も認められる。まず、古墳の発見年月日について逸見氏の記録には見当たらず、他の文献では昭和3年とも大正末期、大正4年とも書かれており定かではない。所在地の記述は、「川尻村」、「小松ヶ岡」、「八幡神社」等、どの文献も共通している。古墳の形態や埋葬施設等に関しては、「高塚古墳」や「石造古墳」、「石槨」、「長方形の竪穴」等というように統一的な記述ではない。出土遺物については、逸見氏の記録がその種類を最も多く記しているものの、他の文献と共通するのは直刀や短刀、鉄鏃といった部分的な項目である。これらを総合的にとらえ、赤星氏は各文献にある古墳が全て同一古墳だと結論付けたようである。なお、古墳の名称を具体的に記しているのは逸見氏の文献中の「小松ヶ岡古墳」のみで、「並木八幡社古墳」という名称は出てきていない。同古墳が鎮座する八幡社は並木に囲まれた長い参道が特徴的であることから、別名「並木八幡」とも言われる。それにちなみ、古墳名に冠せられたのではないだろうか。

[掲載図書]

赤星氏が複写した遺物写真が掲載された文献等は、管見の及ぶ限り見当たらない。

(小西)

引用・参考文献

石野 瑛 1961 『神奈川縣大観 湘西・湘北』 武相出版社

逸見敏刀 「穴を尋ねて」『無良佐岐』第2号

加藤哲雄・馬場 厚 1967 『築井文化』第5号 津久井郷土研究会

津久井郡勢誌編纂委員会 1952 『津久井郡勢誌』 津久井郡勢誌編纂委員会

研究紀要17

かながわの考古学

発行日 2012(平成24)年3月31日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

tel : (045)-252-8689 fax : 045-262-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.17

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (5) Layer B 1~L2	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VIII): An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouti-Type Pottery Period, Part 3	13
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (1)	21
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (9): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	31
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (2)	41
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture (4)	59
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (9)	69
Masae Hayasi: The Studies Production Technique for Inlaid etcetera on Decorative Long Sword in Kanagawa Prefecture	79

March, 2012

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan